

鉄道模型趣味[®]

TMS・Hobby of Model Railroading

MAY 2021

5

N:憧れの急行「土佐」

ED71(1次型)の製作

N:「しまたろう鉄道」物語

4人で「40」周年を競作する

N:阪堺電軌 北天下茶屋駅

ナロー:品川営林署 井戸川林道

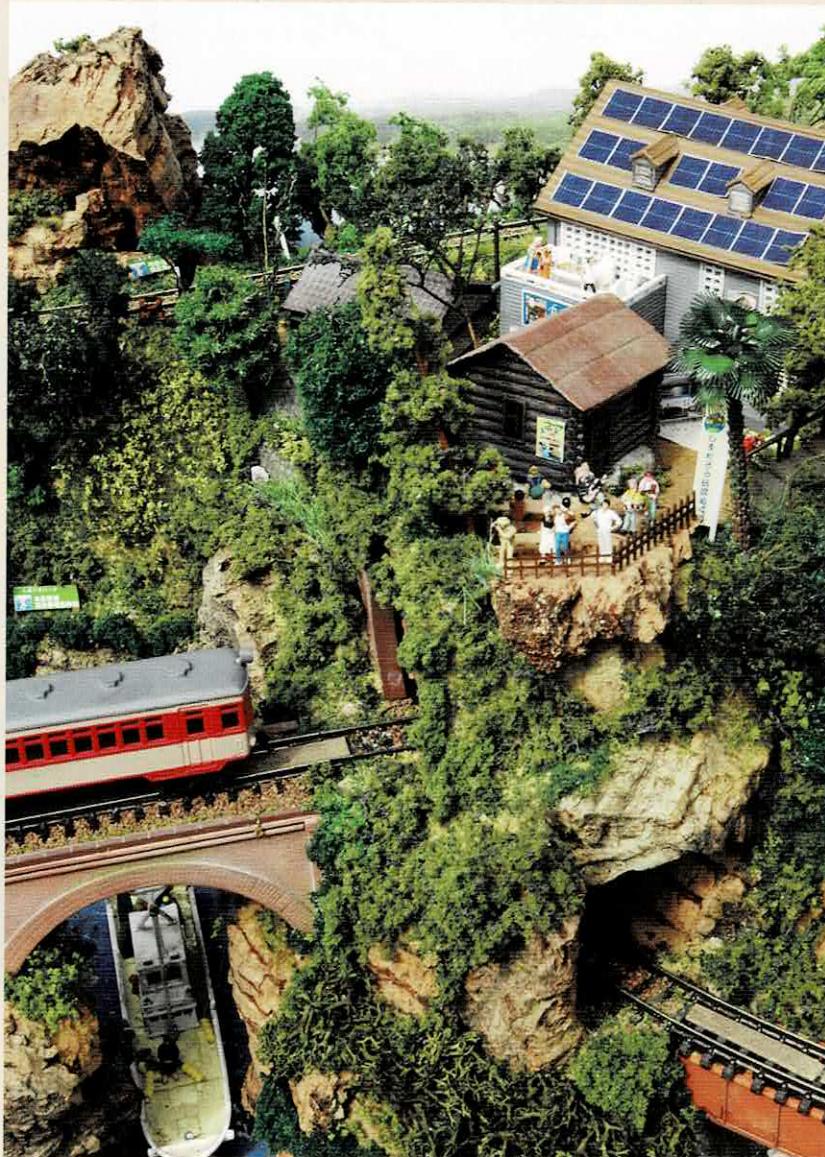
模型ファンのための床下図鑑[2]



伸びゆく大しま 2021

— しまたろう伝説とジオパーク —

しまなみ中学校卒業祝副読本



溝山恒彦監修 『伸びゆく大しま』編集委員会

青海社

「しまとう鉄道」の目指したもの

野中 健一

「しまとう鉄道」は、空間・時間・金・技術が乏しい中で、小さなレイアウトを気楽に作って、走らせるばかりではなく想像の世界を楽しもうという趣旨の一作です。これまで漫画家・柳原望さんとの構想をもとに架空の物語を創作してレイアウトを形づくり、物語を絵本、架空の地域雑誌・映画パンフレット・冊子等の体裁に仕立てています(ご関心ある方は、<http://www.rikkyo.ne.jp/web/nonaka/nonakaresearch/nonakatetsu.htm>をご覧下さい)。

この『伸びゆく大しま』は、舞台とした地域の立役者で鉄道敷設者でもある志摩太朗翁を設定し、その思いと足跡を次世代に伝える中学校卒業祝の体裁にした読み本です。鉄道と沿線の情景を翁の生涯に重ねて紹介しています。2019年レイアウトコンペでは名取編集長より「レイアウトは心象鉄道の具体化です。…レイアウトのモチベーションの原点を見る思い」と高評価をいただきました。まさに私の原点は、かつてけむりプロが提唱された「心象鉄道」の一文「我々の出会ったすばらしい機関車と自然や人間とそれらが創り出す美しい鉄道情景をベースとして、我々の世界に建設する鉄道」にあります。そして、かつてTMS誌上を眠わした名作「浜津鉄道」や「雲竜寺鉄道祖山線」、「the DACHS STORY」など創造と問題提起あふれるレイアウトに、当時小学生の私には、大人の世界のわからないことばかりでしたが、その世界に惹かれ、毎日のように夢を描いて読みふけていました。今もその感情が蘇ります。

「走らせればいいってもんじゃない!」

40代になってレイアウト作りを再び志しました。作りかけの森林鉄道レイアウトを見た柳原さんは小さな列車がトンネルを出入りし勾配を上り下りする様子に興味を抱き、情景の成り立ち、線路や建物がどうしてここにあるのか、どんな意味があるのかを次々と尋ねてきました。しかし、私は返答に窮ってしまいました。柳原さん曰く、「それは物語がない

からだ。走らせればいいってもんじゃない!」「私たちの身の回り、世界のすべてには意味がある。小石一つに至るまで、そこに存在するには歴史があり物語があるのだ」と。

鉄道の存在は、時間と空間を生み出します。鉄道のある風景、移り変わっていく車窓にそこには歴史を伴った自然も人の営みをみることができます。レイアウトを見ているだけで出来事が想起できる、列車を追って線路を辿り、シーンを想像できる…さらに登場人物に共感し、物語の中に入り込んでいき、自ら歩き感じているような世界をレイアウトに込め、見る人にも伝えられるようにと製作するようになりました。

「物語」を創る

レイアウトは、多くの場合、現実をそのまま縮小して模すのではなく、一定のサイズの中に世界をソウゾウ(想像・創造)して作ります。そのソウゾウを形にするにあたり、柳原さんの専門の漫画…大きな物語を構想し、日常の物事や人の感情の描写を情景とともに1コマ1コマに書き、それをつないで時間・場所の移動や視点の変化を伴って具体的に示す技法はレイアウト作りと重なりました。ベースボードが紙面、車窓に見える一瞬の風景は漫画の1コマ、車輌の走行と線路配置がつないで物語のレイアウト(情景とエピソードの時空間配置)になります。

物語創りでは、それぞれのものの意味を明示し、登場人物の人生、嬉しさ・愛おしさ・悲しさなど感情や思いを想定します。要素ひとつにつき「どうしてここにいる/あるのだろう?」と意味が加わります。これによりレイアウト作りでは必要な要素を考えて製作・配置でき、歴史と感情を込めた加工を施して、「生き生き」感、「リアリティ」が出てきます。読者はストーリーを追って人やものと時間・空間とが織りなす世界をレイアウトの情景と重ね合わせ、レイアウトの中で「暮らしている」「歩いている」かのような感覚をもってその世界に浸れます。

製作にあたってそこに暮らす人々に思いを馳せていくには、モチーフとなる日常、旅での出会いや光景を思い起こしてみましょう。「しまとう鉄道」は、小さなレイアウトに海を作りたいという模型製作動機に始まり、それに適したリアス式海岸地形のある陸の孤島といわれた志摩半島を舞台としました。そこに鉄道がある理由を考えていたとき、訪問したイギリス・オックスフォードの小さいながら世界中から集められた民族資料が詰まった博物館で、教え子の留学生が「子どもの頃は毎日ここに通って、世界はなんて広いんだ。外へ出て行かなきゃ、と思った。」と瞳を輝かせて語ってくれました。これにヒントを得て敷設の理由と地域の繁栄を鉄道創設者の一代記に重ねました。そして、自ら経験してきた各地のエピソードや仕事(地理学)・趣味のネタを主人公に託し、志摩から世界へ広がる物語を作りました。情景要素一つ一つに込められた意味からボードサイズ以上に大きな物語が展開します。

鉄道模型だからこそ創作を…

小レイアウトの題材は必然的に小規模な鉄道になります。自分の少年時代はローカル線や小私鉄路線が残っていた末期でしたが、自分にとっては最近のように思えても遠い昔です。しかし、ノスタルジーではなく鉄道が活躍していた時代の意気込みを形にすべく、現在から未来につながる物語を作っていました。物語やレイアウトは、町づくりや地域の諸問題など現代の課題を議論するきっかけ作りにもなります。同業者からは「ウソの文献を載せるな!真剣に探したではないか。」と文句も言われましたが(笑)。

私が名作に感じたわくわくを、拙作にも読者諸氏が感じられるか心許ないですが、こうした表現を、鉄道だからこそできる、そして模型ならでは楽しめる創作の一助として、鉄道模型界のさらなる発展に少しでもお役に立てれば幸いです。

「しまたろう鉄道」製作記

野 中 健 一

〔写真：筆者撮影〕



↑島町の歴史ある町並み。

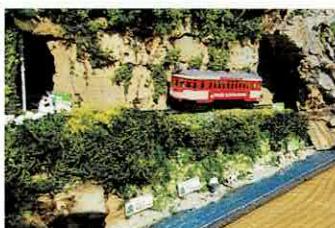
構想の背景

海の景観のあるレイアウトは、子どもの頃からのあこがれでした。小学校時代、毎日のように眺めていた『シナリィ・ガイド』の「海辺の鉄道」に夢想し、TMS誌に登場する大海原の秀作にあこがれていました。

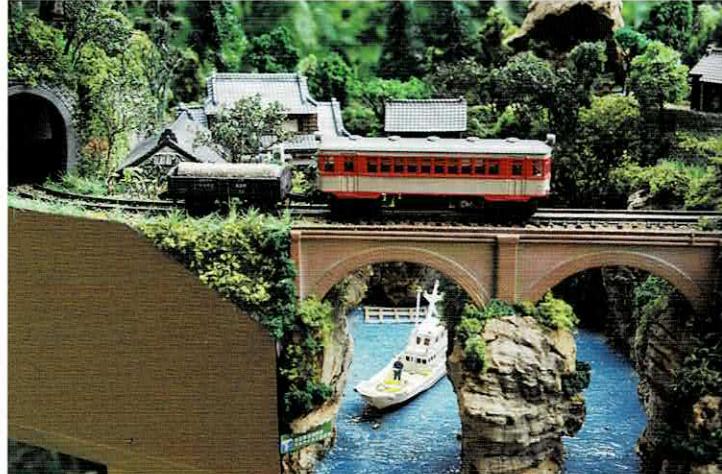
しかし、家庭や製作時間や資金等々、実際に作ることのできるのはごく小さなレイアウトになってしまいます。これまで里山や下町などの情景を取り入れた小作をTMS誌に紹介いただきましたが、両手で持ち抱えて家の廊下を歩けるような小サイズのものに海を入れ込むにはどうしたらいいだろうか？大きな課題でした。そのうちに思い浮かんだのがリアス式海岸の情景です。山が沈んで谷に海が入り込んだ地形は複雑で、海あり山あり、集落ありで小レイアウトに取り込めそうです。馴染みのある志摩半島の風景が思い浮かびました。ここはかつて陸の孤島と呼ばれていたところですが、実際には船での往来が盛んで、独特の生活文化が築かれてきました。



↑ひねりのある山をトンネルで潜る。



↑午後の真珠浜の緩やかな光景。



↑橋梁を行く混合列車。眼下には稀少貝生息地案内。

ここに網元志摩家の長男として生まれた、志摩太朗氏が成長し、世界で学び、地元の繁栄を目論んで、都と結ぶ鉄道を敷設し、地域を外に広げていく…時は流れて、その鉄道が今度は人を呼び込むようになった。そんなモウソウからこの鉄道の構想ができてきました。

レイアウトの製作

20×12mm厚のヒノキ角材と3mm厚ベニヤ板で作った670×300mmのベースボードがあったので、そこにpoint to point の路線で海と山を結

ぶ2駅を作ることからプランを考えました。小スペースでもさまざまな景色を楽しめるよう、高低差をとつてぐるりと回しました。リアス式海岸風景の反対側をどうしようかと考えていくうちに、こちらにも海がつくれないだろうか？と、直線部分を砂浜海岸にしてみました。これで情景にも物語にも広がりができます。線路はギリギリでプランを作っていたので、50mm幅を足して海岸部分としました。台枠を斜めに削って勾配としてその上に線路を敷きました。大海原は望めませんが、それに連なる

■レイアウト全景

